

International Conference on Thermodynamics of Solutions and Biological Systemsに出席して

表記会議がIUPACとインド科学アカデミー、インド工科大学、パンジャブ大学共催で1993年1月3日から1月6日までインド、New Delhi市、Le Meridienで開催された。インドの現状では政治的、経済的理由で国際的交流が十分でなく特に若い世代の育成に問題があった。IUPAC熱力学委員会の決議にしたがってIUPAC委員のI.Wadsö教授(Sweden)が組織委員長となって、菅宏教授(大阪大学)をはじめBarthel(Germany)、Biltonen(USA)、Patterson(Canada)、Jain(India)教授等の多大の援助の下に、インド側のAhluwalia、Jain教授等の努力で本会議開催の運びとなった。国際組織委員の努力でインドの若い世代を育成するため南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの五大大陸すべて(中国、旧ソ連を除く)から全世界的レベルでの熱化学者の協力がなされた。最終的には同伴者を除いて約69人の外国人と約56人のインド(参加者リストにない研究者および学生が若干名)からの参加があり、成功を納めた。日本からの参加者は石黒慎一教授(東工大)と小生のみで、小生が今まで出席した十数回の国際会議の中では初めての経験である。もちろん日本の熱化学者も国際協力を惜しまないが日本では正月は家族のための行事があるので通常この時期の渡航は無理で開催時期を選んで欲しいと主催者には申し入れさせて頂いた。

1月3日の開会式ではまずN.C.Nigamインド工科大学長の歓迎の挨拶に始まり、IUPAC代表としてG.Somsen教授、組織委員長I.Wadsö教授、同委員D.Patterson教授、DVS Jain教授の挨拶と続き、M.M.Sharma教授による開会宣言、J.C.Ahluwalia教授(現地組織委員長)の挨拶が引き続き行なわれた。開会式に続く会議は下記の8件の特別講演とA、B Sessionに別れておこなわれた。

Session

A: Thermodynamics of Electrolytes and Non-electrolytes in Aqueous and Non-aqueous Solution and Mixtures

B: Thermodynamics of Biochemical, Surfactant and Polymer Systems in Solution

特別講演

1. Interaction in Solutions. A Calorimetric Study of Pure and Mixed Solvent Systems.

G.Somsen(Netherlands)

2. Miscibility and Phase Behavior in Polymers
F.E.Karasz(U.S.A)
3. Effect of Osmoregulatory Solutes on the Stability of Proteins
J.C.Ahluwalia(India)
4. Developments in Microcalorimetry with particular emphasis on the valuable role of the Enthalpy Balance
R.B.Kemp(U.K)
5. Thermodynamics of Eutectic Mixtures, Addition Compounds and Associated Mixtures.
R.P.Rastogi(India)
6. A Review of Microcalorimetrically Based QSAR Studies and of Solid State Stability Studies
A.E.Beezer(U.K)
7. Thermodynamic, Electrical and Structural Aspects of the Interactions of Functionalized Calix(4)arenes and Metal Cations in "Allo-steric" Media
A.F.Danil de Namor(U.K)
8. Folding of 4- α -helix Protein : Thermodynamic and Kinetic Studies on ROP
Hans-Jurgen Hiz(Germany)

その他1月3日から1月6日まで2会場で24件の招待講演、42件の一般講演と30件のポスター発表が行なわれた。通常の熱力学的手段のみならず熱分析をも含み、更に理論、シミュレーションを含む広範な分野の発表で、臨床へのカロリーメトリー応用の発表がなかった以外はほぼ全分野をカバーし、特に午前と午後の30分のコーヒブレイクは時間の経つのに気づかずコミュニケーションが進み、セッションの座長が休憩所で開始をアナウンスする光景がほぼ毎回のように見られた。またポスターセッションもあちらこちらで会議時間が終わった後もホットなディスカッションが続くなど、今会議の目的は十分に達したのではないかと考えられる。

1月4日の会議終了後はインドの手工芸品店の見学とCocktail Party、1月5日は午後より参加者全員でバスを連ねてQutab Minar, Baha'i Temple, Indian Gate, Indian Institute of Technology(IIT)を訪ねた。今会議出発直前まで渡航自粛勧告などで問題になっていた宗教戦争の起源



Le Meridienで行なわれた開会式風景

などのシンボルの寺院を訪れ、仏教など数多くの宗教を生んだ"神々と信仰の国"である天竺が、今また全ての宗教は一つであると言う新しい宗教(Baha'i)などを作り、インド思想の多様性を感じた。また会議会場の快適さと比べて、エクスカーション途中車外に見える景色は旧市街の粗悪な煉瓦で出来た想像も出来なかった貧困のスラム街と近代的建物、バイク、Autorickshaw(小型三輪タクシー)、無秩序(我々の感覚)な車の群とクラクション、色々の階層と文化に最大エントロピーを与えたようなとても不思議な世界を感じた。エクスカーションに含まれていたIITはゲートの中に教員の官舎等もある良く計画された大きな大学でゲートの内側に全く異なる西側の世界をそのまま持って来たような感であった。

夕刻のBanquetはアメリカでPhDを取得したインド国文学者でインド古典舞踊の大家による演舞の妙技に魅了

され、またその演舞の内容の説明があり、単なる観劇でない研究成果発表に拍手を送った。

1月6日の閉会式では組織委員長から成功の報告と国際協力へのお礼、現地開催組織委員の水等の参加者への健康管理等に対する細部に至る配慮に対するお礼などが述べられ、さらに今会議の運営、規模などの問題点の調査、次回開催の可能性なども討議され、閉会した。インドの若い研究者は言葉(インドの公用語は英語である)に対する壁は全くないにしても発表会場では少し静かであった様な気がする。しかしコーヒブレイク、昼食、エクスカーション等の機会を見ては国外の教授に果敢に質問しており、合せて留学の可能性を伺っている光景にも接し、非常に良い雰囲気の中で会議が進行し、今会議がインドの次世代の研究者にとって良い機会であったと思われる。(近畿大学理工学部 木村隆良)